

ポスター発表とプレゼンテーションに計27校が参加

近畿地区のSGH校・アソシエイト校が 合同の課題研究発表会を開催

2016年3月、関西学院大学において、近畿地区のスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）校とSGHアソシエイト校が一堂に会して「第1回近畿地区スーパーグローバルハイスクール・SGHアソシエイト校課題研究発表会」（主催・関西学院大学、共催・大阪大学）が開かれた。会場には全国から学校関係者が訪れ、各校の取り組みに対する注目の高さがうかがえた。発表会の様子と参加者の声をリポートする。

課題研究の発表を通して 大学で学ぶ意味を考える

「第1回近畿地区スーパーグローバルハイスクール校・SGHアソシエイト校課題研究発表会」は、グローバル人材の育成に取り組みむ高校の支援を目的に、関西学院大学と大阪大学が高大連携の一環として企画した。それぞれの学校が取り組んできた課題研究の成果を発信することで、高校生に課題解決力・プレゼンテーション能力を高めてもらうとともに、大学進学の意味を改めて考える機会とすることがねらいだ。また、担当の

教師にとっても、指導の検証と次年度に向けた指導改善のヒントを得る場となることが期待された。

SGHの事業が始まった背景には、世界的な教育改革の潮流がある。オーピングセレモニーに主催者代表として登壇した関西学院大学の村田治学長は、参加した高校生たちに次のように語った。

「大学進学率の向上による大学のユニバーサル化によって、大学に求められる役割は、知識・技能の伝達のみならず、幅広い経験の提供へと変わろうとしています。それに伴い、身につけるべき能力も変わりつつあり、欧米では大学卒業後に求められ

る能力として、次の3つが重視されています。それは、①社会に出た後も学習し続ける能力、②知識を実践に応用する能力、③分析力です。

それら3つの能力こそ、高校生の皆さんが学校で取り組んでいる課題研究に必要な能力そのものであり、大学卒業後に世界で活躍するための基礎となる力です。SGHの取り組みで学んできたこと、そして、本日の発表会を通じて、皆で切磋琢磨しながら、大学で何を学ぶべきなのか、何を目標に人生を送るべきなのかを考え、高い志を持つ重要性に気づいてほしいと思います」

その後、参加校の代表生徒が1分

図 「第1回近畿地区スーパーグローバルハイスクール校・SGHアソシエイト校課題研究発表会」参加校

- **SGH校** [2014年度採択] 滋賀県立守山中学校・高校、京都市立堀川高校、大阪府立北野高校、大阪府立三国丘高校、関西大学高等部、神戸市立葺合高校、関西学院高等部、奈良県立畝傍高校 [2015年度採択] 京都市立西京高校、京都学園高校、大阪教育大学附属高校平野校舎、大阪府立豊中高校、大阪府立千里高校、大阪府立泉北高校、関西学院千里国際高等部、清風南海高校、神戸大学附属中等教育学校、兵庫県立兵庫高校、兵庫県立伊丹高校、兵庫県立国際高校、啓明学院中学校・高校
- **SGHアソシエイト校** 清教学園中学・高校、高槻高校・中学校、兵庫県立長田高校、兵庫県立北摂三田高校、兵庫県立柏原高校、和歌山信愛中学校・高校



写真1 オープニングセレモニーでは、参加校の代表者が登壇し、自校の発表内容をアピールした。

間ずつ、課題研究のテーマや進め方、自校の学校紹介などを思い思いにアピールし、発表会への意気込みを表明した(写真1)。そして、共催者の大阪大学教育担当筆頭副理事の進藤修一教授が高校生に期待を込めたメッセージを贈り、オープニングセレモニーは終了した。

84グループが参加したポスター発表

参加校は、近畿地区のSGH校21校、SGHアソシエイト校6校の計

27校(図)で、個人またはグループによる、ポスター発表とプレゼンテーション(口頭発表)が行われた。

ポスター発表には、24校84グループが参加。1つの教室に5、もしくは6グループがポスターを掲示し、1グループ15分間で発表と質疑応答を行った(写真2)。

見学者は他地区のSGH、SGHアソシエイト校の高校教師やSGHに協力している大学教員が多く、発表する生徒にとっては緊張しかねない雰囲気もある中で、どの生徒も自身の研究に対する自信と学校代表と

写真2 ポスター発表は、15の教室に分かれ、計84グループが実施。どの教室も見学者が多く、発表後の質疑応答も盛んに行われていた。

してのプライドを持って堂々と発表していた。

しかし、どのグループも、発表資料の準備は大変だったようだ。京都府の高校から参加した生徒は、「本校の課題研究は、3人で1つの論文にまとめる形式でした。ポスター発表用に長い論文から内容を精選するのは苦労しましたが、学校代表として参加する以上、レベルの高い発表を見せたいという思いで臨みました。全国から来た方々の前で研究成果を発表する機会はめったにありません。大学生や社会人になった時にも生かせる貴重な体験になりました」と語った。

また、別のグループでは、校内でプレゼンテーションソフトを利用して5分間で発表した資料を、今回の発表時間である10分間の内容に膨らませてポスターを作ったという。

海外への発信を意識した国際性豊かな口頭発表

プレゼンテーションは4つの教室を会場として行われた。プレゼンテーションを聞きに来ていた関西学

ポスター発表に参加

兵庫県立伊丹^{いたた}高校1年生
堀越みのり ほりこし・みのり

目指すは自分の研究の実現

本校では「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」を課題研究のキーコンセプトに掲げています。

私は、新しいスタイルの「ふりかけ」を日本の米と一緒に輸出し、欧米で新たな需要を掘り起こすスキームについて研究・発表しました。ポスター発表では、他校のレベルが高かったこともあり、緊張しましたが、多くの方がうなずきながら聞いてくださったので、落ち着いて楽しみながら発表できました。

研究と、普段の学習や部活動との両立は大変ですが、東京でフィールドワークを行い、総合商社の社員や留学生に話を聞くなど、普段の高校生活では経験できないことに取り組めるところが魅力です。2年生では、ふりかけの具現化に向けて、研究をさらに進めていきたいと思えます。

*プロフィールは2016年3月時点のものです



写真3 プレゼンテーションでは、大学教員らが発表内容に関して講評。生徒は真剣な面持ちでその言葉を聞いていた。

院大学経済学部の学生は、「高校生はどの程度、社会に関心を持っているのかを知りたくて参加しました。また、私自身は、高校時代に課題研究をした経験がありません。大学入学後に、高校時代に課題研究に取り組んできた学生と比べて、研究の着眼点や発表のスキルなどの面で後れを取っていると感じる場面が少なくありません。今日の発表では、研究テーマと検証内容が首尾一貫したものになっていくかという点に注目したいと思っています」と、期待を語った。プレゼンテーションに参加したの

は22校で、うち6校は英語で発表を行った。各校20分間、プレゼンテーションソフトを用いながら発表した後、大学教員や大学院生との質疑応答・講評が5分間行われた。

各校の課題研究の内容は、「中国の大気汚染」「発展途上国のICT教育」「インドネシアの交通インフラ」などの国際的なテーマから、「日本農業の発展」「震災復興」「国内の感染症問題」といった、国内や地域に関するテーマまで多岐にわたった。なお、国内や地域に関する課題研究でも、日本と海外とのつながりを意識した内容であり、どの学校も、将来、グローバルリーダーとして活躍したいという思いを感じさせる発表となっていた。

また、発表スタイルは、グループ内で役割分担をして発表する学校、1人の生徒がマイクを片手に熱弁をふるう学校など、様々であったが、いずれの学校も、独自の課題意識に対して、研究の過程で得た豊富なデータで検証を行うなどオリジナリティーあふれるものであった。

発表後の講評では、「分析力が素晴らしく、分かりやすいプレゼンテーションでした」「大学での研究にも生



写真4 会場では留学生と高校生のワークショップも実施。カナダ・インドネシア・ウガンダからの留学生が日本での経験を英語で発表した後、留学生を囲んで懇談会が行われた。

きるでしょう」との賛辞もあった一方、「この研究成果をグローバルリーダーとしてどのように活用していくのか」「科学技術の面を深掘りしてほしかった」といった質問や要望も寄せられた(写真3)。

高校生にとっては、研究成果を披露するとともに、自身の探究能力を高める上で多くのヒントを得た1日となったはずだ。

関西学院大学によると、本発表会の好評を受け、16年度は全国規模に拡大し、「SGH甲子園(仮称)」として実施する予定だという。

口頭発表に参加

大阪府・私立清風南海高校
グローバルコース1年生7人

仮想投資で社会の動きをウォッチ

本校の課題研究の共通テーマは「エネルギー」で、私たちは、そこに「生きていくためのエネルギー」＝娯楽」という観点を加え、航空機産業を研究テーマに掲げました。研究では、バーチャルトレードを利用して航空機産業関連の銘柄のポートフォリオを作成し、株価の動きを見て、社会の変化と企業活動や人々の生活とのつながりについて考察しました。今回の発表は、準備期間が1週間ほどしかなく、直前まで発表スライドを修正して臨みました。本番では緊張し過ぎて、練習通りに発表できなかった部分もありましたが、会場の人たちが私たちのユーモアに反応し、熱心に聞いてくれたのがうれしかったです。2年生では、シナリオプランニングという手法を用いて研究を深めていきたいと思えます。



SGGH研究開発委員会
志方洋介
しかた・ようすけ

課題研究でイスラームへの理解を深める

本校では、イスラーム文化、特に日本と関係の深いトルコやインドネシアなどのイスラーム国家を、共通の研究テーマに設定しています。今回は、その研究成果を携えて、ポスター発表1人、口頭発表1グループで発表会に臨みました。

課題研究の指導で難しかったのは、テーマがイスラーム文化という生徒になじみの薄いものだったため、導入部分で興味・関心を引き出しづらかったところです。しかし、各グループの研究テーマが決まると、生徒は自分たちで資料を探したり、文献を読んだり、主体的に取り組むようになり、研究はどんどん深まっていきました。また、そうした生徒の変化を見ることで、私自身のやりがいにもつながっていきました。

2016（平成28）年度は、研究開発委員会の副委員長を務めます。この1年間の経験を生かして、さらに充実した取り組みにしていきたいと思っています。

文理学科2年生
平田爽
ひらた・さやか

自分で情報の真偽を見極める大切さ

課題研究では、地域創生の観点から再生可能エネルギーの利用について調べました。比較対象として日本とインドネシアの事例を研究し、最適なモデルについてシミュレーションを行いました。そして、現地に赴いて、小水力発電には再生可能エネルギーとしての可能性が十分あることを明らかにしました。

研究前は、ニュースなどの影響でイスラーム国家に対してネガティブなイメージがありました。インドネシアを訪れて、それが誤解だと分かりました。与えられた情報をうのみにせず、本当に正しいかどうかを、自分の目で見極めなければいけないと実感しました。

課題研究は7人のグループで行いましたが、今回の発表会は、私1人で発表を行うことになりました。本番前はとても緊張しましたが、聴衆の方々が熱心に耳を傾けてくださり、たくさん質問もいただけて、楽しみながら発表することができました。



千葉県立佐倉高校教頭
越川淳
こしかわ・あつし
（2016年4月に千葉県立千城台高校に異動）

地域に根差した独自の着眼点に関心

本校は、2015年度にSGGHアソシエイト校の指定を受け、グローバルリーダーの育成に着手してきました。13年度からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に取り組んできたため、課題研究の手法やプレゼンテーション、ポスターセッションのノウハウは、本校にも蓄積があります。ただ、SSHには海外への発信という目標があるため、テーマ設定では世界に目を向けつつも地域や日本に密着した課題を掘り起こすなど、SSHとは違った視点が必要になると考えています。

本校の先生方がSGGHの取り組みを負担に感じないよう、多様な切り口や視点を学ぼうと思いい、今回、見学にきました。実際、様々な学校の発表を聞いて、その着眼点の素晴らしさに驚かされています。地域の強みを生かしたり、日本の課題を浮き彫りにしたりした上で、課題意識を具体的な提案につなげているところは、大いに参考になりました。



島根県立出雲高校
飯野卓
いいの・すぐる

学校間交流のノウハウを学びたい

本校は、SGH・SSHの指定校であり、全校で課題研究に取り組んでいます。自然科学や医療、政治・経済など、分野ごとにグループに分かれて課題研究を進めています。まだまだ発展途上の段階で、指導改善のヒントを得たいという思いから、今日は本校の教師3人と参加しました。

本校の生徒の課題研究の内容を見ると、独自の仮説を立てたり、データに基づいて実証したりという面で不十分などがあります。今回の発表会では、プレゼンテーションの仕方も含めて、テーマ設定の視点や研究方法について学び、生徒の指導に還元したいと考えています。

また、課題研究をより充実させるためにも、本校が所在する地域に、学校や県を超えて課題研究のノウハウを共有する場をつくりたいと考えています。そのため、今日は発表の場や情報共有の場をつくるためのヒントも学んで帰りたいと思っています。

*プロフィールは2016年3月時点のものです